

美沙は続きに何か言おうとしたが、ちよいどいい言葉が見つからない。

「夢、夢ね……。男の人って誰でも多かれ少なかれそういうものを持っているものなのかな。女だつてあるよね。美沙さんあなたは」

「さあ、あつたかもしれないし、もう忘れたわ」

「私も若い頃はしたいことがいっぱいあつたけれど、これだけはつていうような、魅かれるものはなかつたような気がするわ」

律子が言うように美沙もやりたいことはあつた。しかし日常生活におわれ、何もできないまま年を重ねた。もう一度若い日にかえることができたら果たして何をするだろうか。今の美沙には思

当たらない。

律子と過ごす時間は早く過ぎる。話が途切れることがない。夕陽が窓ガラスを照らすようになった。

律子は立ち上がってベージュの分厚いカーテンをひいた。

「すっかりおじやましてしまつて。そろそろ帰らなくちゃ」

「いいじゃない。ゆつくりして行つてよ。夕ご飯一緒でもいいのよ」

「大事なお休みにありがとうね。今日はご近所さんにお見舞いに来てもらっているから、挨拶に行かなくちゃ。陽のあるうちに帰るわ」

「そう。それならしかたないか」

夕食の誘いを断つた美沙は、結局自分の心の中を見せることもなく、律子のマンションを出た。

まだまだ眩しい明るい陽の光りが残っていた。開けた車の窓から、夕方五時を知らずチャイムが聞えてくる。この音色は遠い昔いつも聞いていたような懐かしさを感じる。

自宅に戻つた美沙は、早速、自治会長の家へと向かい、昼間の礼を言った。

近所付き合いを大切にしてきた義父母が亡くなつてからは、美沙たち夫婦は勤めを口実に何かと不義理をしていた。その埋め合わせは今からだ、

と決めている。

美沙は心に残っている重しが取れないままでの朝からの忙しい一日に、どつと疲れが押し寄せてきた。

それでもきょうはバスで出会つた老女と親しくなれたような気がして、夫のいる病院より、〈愛慕里〉へと出向く予定をめぐらせている自分が何となく面はゆい。

美沙は自分の心を探りながら、ぼんやりしていた。

夫は、妹の玲子と寄り添つての写真を、大切に隠し持っていた。それは特別な感情からだろうか。時計の針は逆周りをしないことがわかり

ながら、家で落ち着くとどうしても妹のことが
思い浮かんでくる。

*

玲子が逝ってしまつて二十年。

妹を思うと今も美沙の心はうずく。しかし、い
つも思い続けているわけではない。あれほど哀し
かつた出来事でも、日々の生活に追われながら、
遠い日の記憶として時折よみがえるだけになつ
てしまつた。哀しみにも終わりが来るのだろうか。
玲子の命の分までも豊かに強く生きようと心
がけていたはずだつたのに。

美沙と玲子は仲のいい姉妹だつた。年が離れてい
たせいもあるが、玲子は美沙に逆らうような態度

など一度もしなかつたように思う。

死ぬ間際だつて、曇り顔などみじんもなく、美沙
の妹として生まれ、短かつた日々を淡々と語
り、もしかしたら死んでしまふという不安感にさ
いなまれているだろう、と察しがついていたが、
本人はそのような気配を悟られないようにして
いたことがわかりすぎるほどわかつていた。決し
て自暴自棄にはならず、どこかで回復するので
はという望みも捨てずにいたように見えた。
美沙だつて同じだつた。玲子が突然の病で死ん
でしまふなんて、思つてもみないことだつた。

「私、死ぬのかしら」

玲子は切羽詰まつた声で一度だけ美沙に聞いて

きたことがあつた。

美沙は返事に一瞬間をおいた。

「ばかなことを言わないで」

人の命は念ずれば天に通じるといふものでは
ない。もう精一杯がんばつていた玲子に、「がんば
れ」と、なんてとても言えない。果たして玲子は
どんな返事を期待していたのだろうか。

まさか社交ダンスに励んでいた時は、自分が死
んでしまふなんて思いもよらなかつたはずだ。大
きな夢も抱いていたはずだし、恋だつてしたかつ
ただろう。実りのない夢だけで終わってしまった
二十八年間の生涯は無情としか思えない。

*

もつともつと生きたかつたはずの玲子が、笑顔で
夫に寄り添っている。そして、その写真を夫は
大切に隠し持っていた。
夫の秘密を見てしまったことが美沙の心の中
にわだかまりとして残っている。性懲りもなく
昨晩と同じ想いでいる自分が情けないと思ふ。
美沙はこの場に及んで美沙自身が試されてい
るような気がしてきた。

唐突に、忙しきにかまけ春のお彼岸以来、実家の
両親と玲子の墓参りにさえ出向いていないこと
に気づいた。

初夏の陽が未だ残っている。
美沙は思い立つたように急いで花バサミを出し、

庭に出た。一面に咲き誇っているかのこ草と、ア
イリスにはさみを入れ、一握りの花束を作り何か
に取り付かれたように車に乗り込んだ。そして
両親と玲子の眠っている小高い丘の上のお墓へ
やってきた。車で二十分くらいの距離なのに、
無精して久しく来てないことが恥ずかしい。
初夏の風が美沙の顔を撫でながら、ゆるやかに通
り抜ける。懐かしさがこみ上げてきた。
ずっとずっと昔、こういう風景の中で自分がい
たような感情が、胸の深いところから湧き出て
くる想いだ。ノスタルジックな別世界だった。
立ち止まって大きく深呼吸をした。夕方の風は、
すがすがしい香りを漂わせている。

父が生まれた島が見えるこの墓は、父が生前から
用意していたものだった。
父は瀬戸内海の小さな島で育ちながら、島を出る
ことだけを考えていたと言う。そして晩年は
自分が出てきた故郷の島を懐かしがり、ことのほ
か島の守り神と言われている大楠の木を恋しが
った。
その父は、自分の人生は愉快だったと豪語してい
た。そして、
「仲良く暮らせ」
を、口癖のように言いながら死んでいった。
果たして父の言葉通りに生きているのだろうか。
墓参りを終えた美沙は、覗き込むようにし

樹木のあちこちからメジロらしいさえずりやホ
トトギスの鳴き声が聞えてくる。
美沙は鳥の声に心地よく耳を傾けながら、ゆっ
くりと墓の前に進んだ。
バケツにいっぱい張った水を柄杓でくみ、花立て
に注ぎいれ、残りを墓石にかけた。そして、両親
と玲子の墓の前でただ静かに頭を下げた。
美沙は何も願うこともなければ、打ち明けること
もなかった。ごく自然に穏やかな気持ちで祈って
いる自分に気付いた。すると、先ほどまで悩んで
いたことがほんの些細な出来事のように思えてき
た。
小高い丘の上の墓は静かだった。

海はゆったりと横たわっている。
海を見下ろした。
海はゆったりと横たわっている。
橙色の丸い夕陽を映した海と空の境はどこだ
ろうか。静かな夕暮れの水面に吸い込まれるよう
に太陽は姿を隠していく。息を呑むような自然
の輝きに、いい加減な自分の気持ちに払いのけ
られていくように思え、心が軽くなってきてい
る。港に入る小さな船のエンジン音が弾んでい
る。エネルギーに満ち溢れていた。
ここへ来ると気持ちを切り替えることができる。
流れる時間も、空気もまるで別天地。美沙にはそ
ういう場所のあることが嬉しく、墓を後に、家路
へと急いだ。

(以上5月21日放送分)

美沙が強しいて忘わすれるようにつとめたわけではないが、写しゃ真しんのことは心こころの中なかから少すこしずつうすれてきている。

三さん十じゅう年ねん近ちかく一いっ緒しょに暮くらしてきた夫おつとに今いまさら何なにを望のぞんでいるのか。たいそうなことなど期き待たいしてないのに。

相あ変いわらずの独ひとりだけの夕ゆう食しょくを終おえ、静しずかな時じ間かんが過すぎていく。

つけばなしにしているテレビからは珍めずしく懐なつかしい歌うたがながれている。低てい音おんが売うり物ものの男だん性せい歌かしゅ手が、しみいるような低ひくい声こゑで憂ゆう愁しゆうに満みちあふれた歌うたを歌うたっている。